記憶の共有

落ちてきそうなほど光り輝く満天の星空に、私はただただ見惚れていた。
一年ぶりの宮古島、そして今日が最後の夜。
明日には帰らなければいけない。数時間後には搭乗しているのを想像すると、この星々との距離は近いのに、なぜか遠く感じてしまう。
去年初めて一人で訪れたとき、不安だった。楽しめるかどうか分からなくて。
でも、そんな心配事は無用だった。
太陽の光を受けて咲く花々、サトウキビ畑を吹き抜ける風の音、万華鏡のように美しい海、心に寄り添う三線の音、無限に広がる青空、が私を迎え入れてくれた。
それに、ゲストハウスで知り合った人と名所を回ったり、遊んだりと、とても満たされた気

持ちになった。今でも手紙を交換する仲になれたことが幸せだった。
昨日も、おとといもシュノーケリングをして、一年前、体感した自然を満喫していた。
旅行までの期間は途方もないくらい永いのに、いざ当日になると別次元に移ったかのような、あっという間の四日間。
この景色とは、またしばらくのお別れ。
きらめきに惹かれ、思わず背伸びをする。もう少しで、夜空に手が届きそう。水を両手で掬う動作をすれば、手元に手繰り寄せることができるのではないだろうか。
ずうっと見ていても飽きなくて、流れ星が過ぎ去るたびに、私は私の大切な人を祈っている。
――笑顔でいられますように。
彼がバリスタとして働く姿が素敵で、二人の思い出が共有され、蓄積されていくのを何より楽しんだ。

いつも、隣にいたいと願う。

知り合ったのは五年前。仕事での出会いだった。初めは事務的な挨拶しかしていなくて、まさかこんな風になるなんて微塵も考えていなかった。

彼が、バリスタの実力を図る競技会に向けて準備をしていたとき、私が働いているお店を訪ねてきた。材料の手配を手伝うのがきっかけとなった。

大会が終わったあと、お礼という形で食事に誘ってくれた。

多忙な彼が私にスケジュールを合わせてくれて、合流時刻を決めるとき、午前中からを提案される。

夜ご飯を食べる程度と思っていた私にとって、返答をするのに少しだけ時間がかかり、どんな話をするのか多少の不安を抱く。

当日を迎える三日前、彼からのメール。

――訊きたいことがあるから電話していいですか？

なんだろう、と疑問を持ちつつも、結局五時間近く私たちは語り合った。要件自体は最後の数分程度。雑談で大いに盛り上がった。

気付いたときには日付も変わっていて、自然体でいる私にも驚いた。

初めてこんなに会話をしたとは思えない、不思議な感覚。また、彼が理想のデートを持ち出してきて、積極的だなあという風にも感じた。

同時にその日を心待ちにしている自分もいた。

そのおかげで、会ったときは敬語も使わず緊張もせず一日を過ごすことができた。

付き合ってもいないけれど、浅草へ行って人力車に乗ったり、花やしきへ行ったり、バッティングセンターで打ったり、東京タワーで夕日を見たりして。

夕食を共にしたあと、会計をするタイミングで彼が財布を失くしたハプニングもあったけれど、帰り際、彼は、

「誕生日、少しでいいので僕に時間をください」
と、言ってくれた。
もうすぐ私の誕生日。お祝いをしてくれる――。
その言葉を受け取ったとき、素直に嬉しくて、心配していたのが嘘みたいな高揚感に包まれた。
翌週、秋空の澄み渡る、少しだけ肌を突くような風がなびく時期に、結婚前提に交際をスタートさせる。
それからはいろんなところへ遊びに行った。二人で四季をまたぐように、春夏秋冬を味わっていた。
でも、そんな彼は、またも競技会の時期に差し掛かり、なかなか都合を合わせられなくなっていく。
もっと一緒にいたいのに、もっとずっと話していたいのに。毎日電話していても語り足り

ないくらい、お互いの想いが限界を知らない風船のように膨らんでいく。
終話ボタンを押すのを毎回ためらった。彼とのささやかな繋がりを切りたくなかったから。
それに、ツーツー、という無機質な、現実に戻る音を耳にしたくなかった。
――俺から切るよ。
そういう彼の優しさが愛おしい。

今日が、最後の夜。
宮古島に来ても、彼と途切れないように、何を食べたか、何を見たかを伝えていた。好きな気持ちをただ純粋に共有したいから。
婚約の決断があるのは、彼の大会が終えてからかもしれない。落ち着いた頃に、きっと、もしかしたら――。
ゆっくりと深呼吸をして、吸い込まれるほどの星空をもう一度眺める。彼は、夜空も見上

げられず忙殺されているだろう。
体に気をつけて、と願い、私は瞳に映る夜景にため息を洩らして、宿へ戻った。
最終日の早朝。ゲストハウスの人たちに挨拶を終え、一人ドライブを楽しもうとしたときだった。
乗車する直前、亘くんが目の前に立っていた。

＊

一番大切なものだけが、最低限入っていればいい。
そう考えながら何度も確認して、白いトートバッグを片手に羽田へ。夕方までに業務を切り上げて、朝一で現地に着く便を手配。うまく乗り継ぎできるかが不安だった。
まずは無事、那覇空港に到着。宮古島行きの搭乗時刻までは随分と時間があったから、そ

の間仮眠を取ろうとベンチで横になっていた。
なんとか、予定通り。
一瞬安心するものの、大会の追い込みである時期にこの行動は正直プレッシャーを感じていた。念入りな準備が必要とされるのに、たった一日とはいえ、予選を考慮しない日を過ごすのは少し怖かった。
それでも、このタイミングの方がきっと最適だと、僕の直感が働いた。
仕事帰りなのになかなか寝付けず、浅い睡眠のまま朝を迎え、出発する。
初めて、宮古島に降り立った。直後、一気に汗が噴き出してくる。皮膚を刺す日差し、素足では火傷しかねないコンクリート。
僕は夏を全身で浴びる。
島に着いてからすぐ、売店を探す。
観光名所ともあって、比較的早くから開いているところが多かった。僕はそこで、ハンカ

チを購入した。沖縄らしい、ハイビスカスの。
本当ならば、花束を用意したかった。ただ、オープンしている花屋はなかったため、少しでもそれを連想できるものを選択する。
タクシーを拾って、彼女が泊まっているゲストハウスまで案内してもらう。連絡を取り合ってるとき、さりげなく宿の名を聞き出せたのは良かった。
車窓から見える海辺に目をやるも、リゾート地に来た高揚感は湧かない。それよりも、疲労感と睡魔に襲われており、アロハシャツを着て出迎える人々が視界に入っても、感情は動かない。
車でのわずかな揺れが余計に眠気を誘い、まぶたを閉じないようこらえるのに必死だった。
空港から十分という道のりは、体感していたよりもずっと短く、もしかしたら一瞬眠りに落ちたのではないかと思う。
近くまで運んでもらい、こっそり自分の足で宿へ向かう。入り組んだ小道に自信がなくな

り、早朝から歩いていた人に道を尋ね、慎重に距離を詰めていく。
どんな顔をするだろうか。
僕が突然現れたときの反応が楽しみだった。わずかなイタズラ心がさっきまでの眠気を吹き飛ばす。
蒸し暑さで照っているのか、緊張の汗なのかは定かではなかった。
目の前に二階建ての建物が現れる。上から下へと、視線を下ろしていくと、玄関に近い広場で数人が話している様子だった。
そのうちの一人が、すぐそばに止めてあった車に近づいた。僕も、その人と同じ歩幅で歩み寄る。
視線が合う。
あこちゃんだった。
彼女は、咄嗟のことで僕を判断できなかったようで、驚きに包まれたような表情をする。

「えっ、なんでなんで。どうして？」
そんな予想通りの、期待通りの顔つきを、慌てふためいている姿を見て、僕は安堵する。
君に、会いに来ました――。

＊

「えっ、なんでなんで。どうして？」
びっくりして、彼に何度も同じような質問をして、しまいには泣き笑いの状態に。亘くんの顔を見た瞬間嬉しすぎて、仕事が忙しいのを知っていたからこそ、その行動に感極まって軽いパニックを起こしていた。
「いつ帰るの？」
「今日だよ」

「いつ来たの？」
「今朝だよ」
「えっ、日帰り?!」
自分では気付かないくらい大きな声を出していたようで、ゲストハウスに泊まっている人たちも近くに寄ってくる。
今日中の帰宅を知り、二人で島を散策することに。
荷物をほとんど持参していなかった彼は、ビーチサンダルすら用意していなかった。売店で購入し、サトウキビ畑に囲まれた何もない道を歩いたり、ビーチへ行ったり、宮古そばを食べたり。私は普通のだけれど、彼は肉盛りの。きっとお腹が空いていたんだろうなと思いながら、そんな中でも訪ねてくれたことを改めて喜び、頬張る彼を見て私は安心していた。
彼にとって初めての宮古島を、私と一緒に過ごしているのが幸せだった。
ふと、時計を見るとお昼頃だった。そのタイミングで、彼が言った。

「行けたとしても、あと一つか二つくらいだね」
まるでシンデレラのように、東京に帰らなければならないタイムリミットが迫っていた。
次、焼けるような暑さを体感できる日はいつになるだろう。もう少しだけ、店内や車内での瞬間的な冷気に歓喜する瞬間を、味わせて欲しかった。
最後に向かったところは、来間島。
まっすぐ伸びた橋が島にかかり、隈なく広がった紺青の空が、私たちを手繰り寄せるよう。そんな藍を溶かしたような光景が、これから別の国へと連れて行ってくれる気がした。
来間島のビーチは、ほとんど人のいない半貸切状態。
絶景の宮古ブルーと雪のように柔らかい白い砂浜を見て、立ち尽くす。去年も、つい昨日もおとといも海とたわむれていたのに、なんだか違う景色を眺めているようで、私の高鳴りは収まらなかった。映画のワンシーンのような風景に、子どものようにはしゃいだ。
ケータイで写真や動画を撮り、思い出が増えていく。容量がいっぱいになるかもしれないく

らい、撮影した。でも、私たちのメモリーに上限はなかった。このまま時が止まればいいのに、と思いを馳せながら海岸沿いを歩く。少しだけ冷たい海水と、静かで優しい潮風、そして白いワンピースが夏を主張した。

照りつける太陽は、今朝に比べて大きく傾いていた。

四つの足跡が波にさらわれていく。

「また、来ようね」

彼がすぐ近くにいると思って声を洩らす。膝下までついた砂を、私は払いたくなかった。

私の問いに応えるように海がさざめいた。

「何もかも、ぜーんぶ綺麗だね――」

空を仰ぎながら言った。

「あこちゃん」

ふと、彼が私を呼んで、振り返った。

＊

来間島に到着し、車から降りて、茂みに囲われた細い道を歩いていると一気に緊張している自分がいた。

飛行機の手配や合流時、宮古島を観光している最中は何も感じなかったのに、もうすぐ――というタイミングが迫ったとき、鼓動が早くなっているのを隠せなかった。

頃合いを伺っていたら、いつの間にかお昼を過ぎていて、最後の好機であるビーチを前にすると、少しだけ呼吸が荒くなる。

ただ、眼前に広がる絶景を瞳に宿したとき、言葉を失い、瞬間的に張り詰めた糸は切れた。綿のような白い雲が陽の光を帯びて優しく迎えてくれた。

その光景を目にして、はしゃぐあこちゃんを見たあと、口内に溜まっていた唾を飲み込ん

だ。

まるでプライベートビーチのような人影の少なさに、チャンスだと思った。人がたくさんいた中ではせっかくの雰囲気も台無しになりかねない。

海岸を歩き、無人の場所を求めて移動する。誰一人いないのを願いながら。

幸い、観光客も宮古島の住民もいないところまでやって来た。

もう、ここを逃せば次はない。

そう考えた途端、もはや海や空、砂浜のことなんて頭の中から消えていた。全て波に引き込まれてしまったよう。

写真を撮りながら、様子を窺った。

来間島に着いてからずいぶんと経ったような感覚を抱いた。

まだ、たった数分しか経過していないはずなのに、そうさせているのは、あまりにこの短時間で考えることが多すぎるから。

人生最大の決断を下す間際。張り裂けそうな思いだった。

なんて伝えようかを、前日の那覇空港で寝るときに考えていた。ネットで検索して、定番の言葉から少し回りくどいフレーズまで色々。たくさんありすぎて迷ったものの、結局はシンプルの方が潔さを感じられた。

だから、その一言――を言えば良いと納得したのに、うまくその言葉が出てくるかが不安だった。それを拭うように、トートバッグに入れておいた小さな白い箱を確認する。そして、一緒に渡そうと思っているハイビスカスのハンカチ。高鳴る鼓動は、一向に収まらない。

僕たちは岩陰に荷物を置いた。

軽装だった彼女は真っ先に海岸へ走っていき、僕はその後ろ姿を見つめる。白いワンピースが、照りつける太陽と共に存在する雲のように美しかった。水面に浮かぶ輝きは、近付けば手に取れるのではないかと錯覚するくらい、散りばめられている。

見渡す限り、自然以外何一つない光景を確かめたとき、プレゼントを右後ろのポケットに

忍ばせた。違和感のある膨らみに気付かれないように彼女の元へ。
「……」
何か言ったみたいだが、海が鳴いていて聞こえなかった。もう少し近寄ってみると、今度は、
「何もかも、ぜーんぶ綺麗だね――」
と、呟いていた。
数分後、二人の世界は変わる。それからの時間を思うと、とても愛おしく感じる。
「あこちゃん」
声が裏返るのを抑えて、冷静に呼びかける。
彼女が振り向く。
笑顔を絶やさない彼女。優しい心を持つ彼女。僕は彼女と出会えて、知り合えて、付き合えて幸せだ。

彼女は笑っている。僕も喜びに満ちている。
僕は片膝をついて、手のひらサイズの小さな箱を取り出し、蓋を開けた。
「結婚してください」
その一言を伝えた瞬間、砂浜と同じくらい頭が真っ白になり、顔を見るのも照れくさくて、でもどんな反応をしているのかはすぐに分かって、心臓が張り裂けそうになった。彼女の、驚きと嬉しさが混ざり合って、感極まって瞳から雫が零れ落ちる。
「はい――」
彼女から返事をもらい、僕も泣いた。
お互いの涙を、ハイビスカスのハンカチで拭う。
今まで体感したことのない感情を覚え、気持ちが解き放たれた。
僕は彼女を抱きかかえて、くるくると回った。
僕たちは、記憶の共有をしていくパートナーになった。

＊

新郎　飯高　亘
新婦　森貞　晶子

二〇一七年七月二十日　プロポーズ
二〇一七年十一月二十五日　結納
二〇一七年十二月三日　入籍日

あとがき：

数年前、遊びに行った宮古島で泊まったゲストハウス、それこそファミリアというところで知り合った方からの紹介で、今回森貞晶子さんとお会いする機会をいただき、取材することになった。

話を聞いていると、本当に不思議とタイミングが重なっているなと感じた。

あこさん（親しみを込めて）が宮古島での最終日、ツアー等でどこかに出かけてしまっていたら、そもそも会えなかった。来間島での貸切状態のビーチをはじめとして、全ての条件が整えられていたかのような状況に、結ばれる運命だったというのがよく分かる。

本文には明記しなかったが、帰りの飛行機、チケットの手配をしていなかった。二人別々の席になる可能性もあったが、運よく最後部座席、並んで取れたとのこと。天候も、現象も何もかもが彼ら二人を引き寄せるために働いたとしか言いようがないほどの出来事に、私自身が満たされる気持ちに包まれた。

結婚してからは、亘さんの仕事の関係で茨城へと移住。これまでの環境よりも、ずっと長い

時間一緒にいられることが、二人の喜びであることを、口に出さずとも感じられた取材だった。

いつまでも二人が幸せで、笑っていられることを願っている。

ご結婚おめでとうございます。

そして、ご参列された方々にとっても幸せな一日でありますように。

ライフストーリー作家　築地　隆佑